

観音物語 (12) 呪わば穴ふたつ

しゅ そ しょどく やく 呪詛諸毒薬
 しよよくがいしんじゃ 所欲害身者
 ねん び かののんりき 念彼観音力
 げんじやく お ほんにん 還著於本人
じゆそ もろもろ 呪詛と 諸の毒薬とに
身を害せんとする者
彼の観音の力を念ずれば
かえ 還つて本人に著かん

藁人形に釘を打つには暗い場所がいい。人知れずに行なうには夜中の零時を過ぎたほうがいい。釘の長さは五寸がいい。音を防ぐために綿を巻いた竹釘と木槌がいい。黒っぽい衣服を着て一人で行なうほうがいい。

チリリリリリ……。枕元のタイマーが鳴った。ちょうど零時である。仮眠をした黒子は身支度をして高級車のハンドルを握った。自宅から鬼門の方向へ走っていく。黒子は湖畔に車を止めた。夜の砂浜にさざ波が寄せている。人形と釘と槌が入った黒いリュックを背負って歩き始めた。竹藪の柵を乗り越え、足を忍ばせ、息を殺し、枯れ葉を踏む。静かに、静かに、道なき道を奥へ奥へと、クマザサを分け入る。足元は真っ暗であるが、月光が射し、林間に月影を落している。

杉や桧、柏、松などが育っている雑木林である。鬱蒼と茂った雑草からツタが伸びて幹にからみき、枯れてしまっている木の枝もある。ツタカズラはちゃっかりとしたもので、美しく紅葉して、林の中でひときわ目立っている。黒子は、これまでとは違う場所を選んだ。この夜は、鮮やかに紅葉しているツタを選び、紅い葉のしげみの中に藁人形を打ち込んだ。

死ね、トン……。死ね、トン……。死ね、トン……。赦せない、トン……。赦せない、トン……。絶対に赦せない、トン……。死ね、死ね、死ね、トン、トン、トントントン……。

これで三体の藁人形が山中にしっかりと打ち込まれた。旦那の浮気が発覚し、会社重役の主人は女の家から出勤している。すでに半年ほど帰ってこない。亭主を乗っ取られた黒子は「四」のつく日に山林に忍び込み、藁人形を打ち込んでいる。二人の髪の毛と爪があれば呪詛の効き目が増すけれども、今となっては入手困難である。しかし藁人形が「四体」になれば、あの二人は「死体」になる。黒子はそのように信じている。最後の一体が十日後に残された……。

いよいよ四体目の藁人形を打つ夜がやってきた。雨がしきりに降っている。

黒子は不覚にも濡れ落ち葉に足を滑らせて転倒。その拍子で杉の根もとの岩に額を強く打った。出血している。頭が痺れる。なんと、その幹に藁人形がいた。三十日前に打ち込んだ人形である。黒子はギョッとした。

さらに奥をめざして歩く。雨の草叢は下半身をずぶ濡れにする。地面をはっているツタに足を取られ、またもや転倒。くやしまぎれにそのツタを引きちぎろうとして引っ張った。ツタは木の根元から幹の上方につながっている。思いっきり引っ張った。そのとき、上から藁人形が落ちてきた。二十日前の人形である。黒子は驚嘆して後ずさりした。

額からしたたる血にやぶ蚊が止まる。蚊の総攻撃を受けて手足や首筋がぼこぼこに腫れあがり、全身が熱っぽくなってくる。三体目の藁人形にたどり着いた。釘に打ち込まれている人形を見てまたもや青ざめた。口が割れ、薄笑いをしているからである。フクロウの低い声が闇に鳴いている。全身に悪寒が走り、四体目を打てば自分が死ぬと思った。

藁人形を打つ気力が失せた黒子は、人形を握ったまま、全身びしょ濡れになって車へ戻った。なんと、車内に主人と女がいるではないか。スペアキーで入ったらしい。二人は、黒子の怪しい夜中の行動を察知して現場で待ち伏せたのである。黒子はあわてて藁人形を湖へ投げ捨てた。

車中の二人は水面に浮いている藁人形を眺め、黒子の夜中の不審な行動を確認し、旦那はエンジンをかけた。ところが、湖畔の砂地に止めていた車が雨にぬかるみ、タイヤが空回りする。車体が沈んでドアが開かない。アクセルを踏めばタイヤは空回りするばかりである。黒い高級乗用車は傾きながら、ますます沈んでいく……。黒子は笑いながら眺めている。

その十数分後、サイレンを鳴らしながら消防車がやってきた。閉じ込められた二人は車内からケータイでレスキュー隊を呼んだようである。

藁人形がさざ波で踊っている。